



Episode 8 (前編)

50 余年昔の米国留学 —Prof. Dameshek の最後の fellow—

本コーナーのタイトル「Be Ambitious!」はウイリアム・エス・クラーク博士の名言“Boys, be ambitious like this old man”から拝借しました。「未来を自ら切り拓くべし」という後進への強い期待の意も込めて、長年に渡り、血液学の世界で活躍して来られた名誉会員の先生方から現役の先生方に向けた熱く且つ含蓄豊かなメッセージをお届けいたします。



東京医科大学名誉教授
第 17 期日本学術会議会員
損保ジャパン日本興和診療所
外山 圭助

はじめに



何年も前に編集委員会から、Prof. Dameshek の教室への留学について書くようにと御指示をいただいていた。しかし、パソコンに向かうと坐骨神経痛が悪化して何度か中断していたが、本年度から臨床血液誌に「Be Ambitious!」という題の付いた欄ができ、やっと完成した私の原稿の内容は、これに合致するか疑問である。しかし、50 余年昔の米国留学は、今振り返るとカルチャーショックの連続で、まさに隔世の感がある。微力な私が独力で米国に留学した体験は、私にとって be ambitious であり、外国留学をお考えの若い先生方にお役に立つことを願っている。

初めての渡米



1963 年 6 月 21 日、米国の Prof. William Dameshek のもとに留学するため、ボストンを目指して東京を発つことになった。当時は東京オリンピック前という時期で、高速道路もモノレールもなかったので、早朝に兄の運転する車で、見送りの父母と同乗し一般道を通って時間をかけて羽田空港へ到着し、ここから、手荷物と自分の胸部 X 線写真（平面と肺尖撮影）を持参し、希望と不安を抱いて出発を待った。当日は慶應大学内科から同時期に米国でインターンを目指す松岡健平（後に日本糖尿病学会理事長）先生ともう一人の後輩医師と同じ航空機に乗ることになっていた。そのため、図らずも羽田で医学部の応援団員の（盛大な？）見送りを受け、当時とはいえかなり恥ずかしかった。また、羽田の滑走路が長距離ジェット旅客機 DC8 や B707 に短すぎ、夏季には空気密度低下による重量過重で全座席を乗客で埋めることができず、しかも、滑走路の全長を使ってやっと離陸できた状態であった。

当時の太平洋路線は米国のパンナムとノースウェストと日本航空のみで、私の乗った JAL の DC8 機は米西海岸まで一気に飛ぶことはできなかった。午前羽田をたち、夜にホノルルに到着し、そこで入国審査を受け、同時に持参した胸部レントゲン写真で結核がないという証明を得て無事に合衆国入国となった。ホノルル空港で給油の時間待ちのために、JAL が用意したカフェテリアでお茶をすることとなり、白人のウエイトレスから、アイスクリームのフレーバーは何かと聞かれ、バニラと英語を発したところ、これが通じて大いに安心した。というのは、当時米国帰りの神経内科の先輩にバニラという語はなかなか通じないと脅されていたからである。

夜明けにサンフランシスコ空港に到着し、迎えに来てくれた松岡先生の知り合いの米国人の大きな convertible car で街に向かう際、highway を猛スピードで走行したときは初めてのことゆえ大変感銘を覚えた。また、当時、東京では渇水のため水制限を受けていたのでサンフランシスコの街では、公園や家々の庭に sprinkler で絶えず水が撒かれており、青々とした芝生の風景にも感心し、かつ日米の経済的な差を痛感させられた。

サンフランシスコで1泊、翌朝、ロスアンジェルス経由の飛行機で大陸を横断した。途中、飛行機から眺める景色は、広々とした大地、山また山、畑ばかりの平原と中に縦横に広がる高速道路、海のように大きな湖、そして、森と湖の大地と私にとって初めての光景であった。日が傾く頃、やっとボストンの町が見えてきたが、空から見るボストンの町は、高層ビルの数は少なく、町の中心とおぼしきところに唯一の高層ビルが建設中であった。西海岸から東海岸まで、4時間の時差があり、中学生のときに終戦を迎えた私としては、つくづくこのような大きな国と戦争したむなしさを感じた。

ボストン空港には慶應大の1年下で、Tufts-New England Medical Center の Cancer Research の Fishman 教授のラボに在籍中の渡辺慶一（後の東海大病理学教授）先生が迎えに来てくれた。空港から車で highway を通って、down town の中華街を抜けてすぐの Harrison Avenue を通っているときに、「外山さん。この左右の建物が Tufts Medical Center の建物で、この右側の6階建ての褐色の建物が、先生が働くことになる New England Center Hospital ですよ」と言われたときには、私の想像では米国の大学病院は広いキャンパスにビルが建っているものと思っていたので、当てが外れた感じだった。そのビルの反対側にある4階建て建物が私の住処となる寄宿舎 Posner Hall であった。寄宿の4階の部屋に入ると、ドアの反対側に中庭に面した窓が一つあり、庭をはさんで看護学生の宿舎があった。片方の壁際にベッドと簡単な洋服たんすがあり、反対側の壁際に黒い電話のついている机と簡単なたんすが一つ置かれていた。共同のトイレとシャワー室は廊下を挟んだ反対側にあった。夏休みのせいかわビル全体が静かであったが、冷房がなく、西日を浴びて室内はむっとした状態であった。その後、渡辺先生に寄宿舎地下の電気洗濯器が並んだ洗濯室やすぐ近くにある病院スタッフの駐車場、病院内のカフェテリア、病院付近のカフェ、理髪店など、とりえず生活に必要な場所を教わった。長い日が暮れると、部屋と反対側の窓からは、当時ボストンでもっとも有名なハンコックビルの屋根の上に、明日の気象情報が点灯するのをながめて、私は留学第一夜の眠りについた。

私の Tufts 大学スタッフとして正式なプログラムの開始は7月1日からであり、Prof. Dameshek とは事前に手紙で6月28

日午前に appointment をとってあったので、ボストン到着から約1週間は留学生生活をスムーズにするための準備に当てるように利用することができた。当時は現在では考えられないことであるが、米国から帰国した神経内科の先輩から“留学期間をノイローゼにならないことが最も重要で、まずその土地になれることが肝要だ”とアドバイスされていたことも早めに米国に来た理由である。

Tufts-New England Medical Center は down town にあり、近くにチャイナタウン、1ブロックのところにデパート、ウォルマート、映画館、酒場などがある Washington Street あり、常に喧騒にあふれていた。また、数ブロック先には、Boston Common と Public Garden という古くから有名な公園もあり、金色の丸屋根を持つ州議事堂をはじめ、米国独立に関係する有名な建物・場所を巡る Freedom trail があった。近くに subway の駅もあり、有名な美術館や symphony hall に容易に行ける利点もあった。したがって、ほどなく渡辺先生の薦めにしたがって、ボストン交響楽団の定期演奏会のチケットも手に入れることができた。これもある意味ノイローゼ対策である。後になって宿舎の近くの中華料理店に行ったとき、中国人の女主人から日本人医師の消息を尋ねられ、その医師がすでに帰国したことを告げると、「それは良かった、彼がここで酒を飲んでしばしば醜態を見せたのは、家族と離れ単身渡米してきた寂さからだ」と言われた。このような時代でもあった。

留学の準備



私は1958年に慶應義塾大学内科学教室の三方一沢教授の大学院生となり、長谷川弥人講師の主催する血液研究室に属し、内科学教室の当時のシステムにしたがって臨床と研究に従事した。臨床に関しては病院にはまだ中央検査室が存在しなかったため、病棟では回診前に全血液患者の耳朶からメランジュールを用いて採血、末梢血検査を行い、末梢血標本を自分で染色、鏡検してヘモグラムを読む。さらに検尿や血糖の定量や肝機能検査も病棟の検査室にて自分で測定した。保存血輸血はボトルに入っており、新鮮血輸血は提供者から100mlのガラスの注射器に抗凝固剤を入れて採血し、そのまま患者さんに注入するという時代であった。

私の祖父・外山亀太郎は東京帝国大学農学部教授で、1906年にメンデルの法則が動物（蚕）にも適用されることを世界で初めて実証し、かつ、蚕の一代雑種の有利性を実用化し、日本の養蚕改良に貢献した。その功績により帝国学士院賞と日本発明協会恩賜記念賞を受賞した。また、1911年から2年間、政府派遣で

ヨーロッパに留学したと、子供のときから父から聞かされていたので、漠然とした外国留学の憧れを持っていた。

私が米国留学を目指したのは大学院4年頃で、当時、血液研究室からは2年上の先輩が自身で職を求めて、ドイツ、フライブルグの有名な Prof. Heilmeyer のところに留学中という状態であり、特に外国のどこかの大学や研究室と交流があったわけではなかった。そこで自分の履歴と現在までの研究歴を記し、2～3年留学したい旨を Woodstock の古い手動のタイプライターを打って手紙を作り、10数通いろいろな大学の先生宛に送った。返事は有望なもの、全く望みのないもの、いろいろあったが、1962年春頃最初に fellowship に関して具体的に返事を下さったのが Prof. William Dameshek であった。先生の教室には trainee, research と clinical fellow の3種の fellowship があり、それぞれの内容や条件などが書いてあった。当時、Prof. Dameshek は雑誌 Blood の editor-in-chief であり、白血病や Hodgkin 病の化学療法、ITP のステロイド療法の先駆者として、また myeloproliferative disorders の概念提起など臨床的分野で有名であった。私は臨床に大いに興味があったが ECFMG 資格がないので、早速 research fellow を希望する旨を返事した。そして、当方には特別ファンドがないこと、給料はそちらで出してほしい旨をお願いした。その後いろいろな手続き書類などを送付し、正式に Prof. Dameshek の教室に留学が決まったのは1962年の11月頃であった。身分は New England Center Hospital の Hematology Research Fellow で、給料は年間無税で3,600ドルということになった。この金額は当時1ドルが360円のレートでもかなり経済的には苦しい状態である。しかし、当時の New England Center Hospital のインターンは、衣食住は保証されるものの無給であった。また、日本からの海外に出るにあたって持参できるドルに制限があり、私のパスポートには大平正芳外務大臣の名前と200ドル持ち出し許可と記されていた。そこで、New England Center Hospital の事務長さんにとりあえず病院の独身寮に入りたい旨と6月22日から入れるように連絡した。その結果、前述の部屋が電話代無料で月45ドルという条件で提供されたのであった。その後に Utah 大学の Prof. M. Wintrobe から受け入れて下さるという手紙をいただいたが、ボストンに先に決まってしまった旨を書いて、丁重にお断りした。

1963年3月には米国で臨床もできるように、東京で ECFMG 試験を受験した。試験勉強をする時間がなかったので、誰にも知られず密かに受験するつもりであったが、当日試験場では他科の同級生1人と10人余りの顔見知りの後輩の医師や学生に出会ってしまい、もっと勉強してくるべきだったと後悔した。試験は1日で午前、午後基礎を含む全科の筆記試験があり、中間に英語

力のテストがあった。筆記試験のほうは内科の問題が多く、私にとって有利に思えた。英語力のテストは患者の訴えが読み上げられ、それを病歴にまとめるものであった。とにかくあまりできたように思えなかったが、医学知識、英語力の両方のテストに合格した。これで臨床医学知識に自信がつき、研究のみならず臨床に携わることができると喜んだ。さらに、万一契約が途中で中断した場合、どこかの病院で働いて帰国の旅費が稼げると安心した。

Prof. Dameshek の教室



6月28日午前、Dameshek 先生と面会の appointment にしたがって、Pratt Clinic New England Center Hospital のビル(写真1)4階にある Department of Hematology の一角にある先生の部屋を訪れた。予想に反して部屋はさほど大きくなく、前室のドアが廊下に向かって開いており、隣の前室とつながっていた。その前室に Dameshek 先生の秘書さんと隣室の Associate Prof. Mario Baldini の秘書さんが忙しそうにタイプをたたいていた。秘書さんに案内されて入った部屋は先生が座しておられた机と、客用の腰掛けとがあるだけであった。先生はワイシャツにネクタイ、白衣姿でにこやかに迎えて下さった。話し始めた



写真1. New England Center Hospital

き、「Your English is very good」とおっしゃって下さって、その後、私がやってきたことを尋ねられたので、研究はヘモグロビン代謝における鉄の再利用などを中心に行ってきたこと、教室は再生不良性貧血などを中心にしてきたことなどを話した。また、新しいこともやるつもりであることも伝えた。先生からは胸腺に興味があるかと聞かれたので、私見を披露し、最初の面談を終えた。その後、Tufts大学の新人医師の規定にしたがって Educational Secretary という役目の女性のところに出頭して、身分証明書とネームプレートもらい、リネンルームや、郵便物やカンファレンスを含む病院のスケジュール、そのほか給料の小切手などを受け取れる郵便室を教えられ、さらに、病院の一斉健診の日時を告げられた。このとき、病院の医師はすべて American Medical Association (AMA) に加盟することになっていると言われ、大変驚いた。日本でも全国の医師が一律の医師会に属していれば、医療に関する諸問題は現況と大部違っていたらうなと今でも思っている。

7月1日は新たに病院で働くことになった医師の健診日で、まず、看護婦から病歴を聞かれた後、医師の診察を受けたが、担当医と互いに自己紹介があったところ、Hematology 所属とわかって診察は簡単に終わった。後に他の人から聞いた、陰部検査なども行われることもなく、破格に簡単に済んだようだった。

ラボに勤務初日に、染色体と細胞化学、造血などを研究していた Assistant Prof. Jack Mitus から声をかけられ、その部屋にとりあえず出入りすることになった。この部屋では Dr. Kosmos Kiossoglou というギリシャ人 fellow が女性研究助手と染色体の仕事に従事していた (写真 2)。このほか Dameshek 先生の教室には Mario Baldini 先生の血小板グループ、さらに、ヘムを研究するグループがあり、別のビルには Assistant Prof. Robert



写真 2. Dr. Mitus のラボグループ : Dr. Kiossoglou と実験助手と共に

Schwartz の免疫のグループ、凝固のグループ、さらに、その他のビルに胸腺などの研究グループがあった。したがって、Hematology の教室には教授と 3 名の幹部のほか clinical fellow を含む総勢約 20 名ほどの医師が所属していた。その国籍は米国のほか英国、イタリア、オーストリア、ギリシャ、日本、インド、スリランカ、メキシコ、チリ、ブラジル、アルゼンチンなど多彩であった。その他 10 名くらいの臨床検査技師と実験助手が働いているという大所帯であった。

ここで初めて Baldini 先生の下で研究されている日本人の fellow にお会いした。お一人は関西医科大学内科助教授の守屋邦男先生で、ニューヨーク (NY) から移ってこれ、ほぼ 1 年血小板の仕事をされ、1 ヶ月以内に日本に帰国されることになっていた。守屋先生は私と同じ Posner Hall に単身で住んでおられたので、わずかな日々であるが、いろいろラボや病院、近隣の情報を教えていただいた。もうお一人は新潟大学第二内科学講師の寺田秀夫先生で、御家族と一緒に来られており、Baldini 先生の fellow として 1 年前から血小板の仕事をされていたが、さらに 1 年間滞在される予定であったが、6 ヶ月後に身内の御不幸で急ぎ帰国された。

Hematology の公式スケジュールは今では詳細には覚えていないが、月曜日、水曜日、金曜日は Dameshek 先生の回診があり、それにはおおむね教室の全員が参加することになっていた。しかし、research fellow に関しては、仕事の場合は自由に出発することができた。また、回診前に Dameshek 先生が教室の狭い臨床検査室で clinical fellow と一緒に患者さんの血液標本を見ることになっており、Hematology の幹部もしばしば参加した。特に Mitus 先生は臨床に熱心で morphology も得意なせいか必ず出席されたので、私もしばしば参加した。Mitus 先生は優れた教育者で、しばしば、clinical fellow が症例のことで相談に来ていた。また、教室には全米から診断の難しい症例の consultation があり、Mitus 先生はそれらの症例の血液標本を clinical fellow や私に見せて下さって、一緒に議論 (試験?) をして下さった。このような機会にオレゴン州から送られてきた Chediak Higashi 症候群のスミアを初めて見る事ができた。これらの経験は将来的に血液臨床に携わる上で非常に得るところが大であった。Dameshek 先生の回診は、しばしば教室への訪問者も参加することがあったので常に人数が多かった。患者さんの部屋を訪れた後、部屋の前の廊下でインターン、レジデントが症例を紹介し、さらに clinical fellow が補足説明やコメントを加えた後、参加者全員で Dameshek 先生を中心に discussion することになっていた。ときには先生のほうから、それぞれの専門のスタッフに意見を求めることもあった。したがって、回診には時間がかかった。また、Dameshek 先生は私のような 1 年目の fellow

の意見もきちんと聞いて下さった。当時のことゆえ、先生は臨床現場の医師に診断のほとんどは病歴・現症と morphology を含む血液検査の結果で決まると強調されていた。この時期に病棟で、SLE に 6MP を用いた免疫抑制療法が実際に行われていた。

木曜日はラボにある会議室兼図書室で journal club があった。日本と変わりなく論文の紹介であるが、会議室に多くの血液関係の雑誌が常備されていた。この室の片隅にコピー機が設置されており、自由に文献をコピーすることができて感激した。なぜなら当時、慶應大学医学部には図書館を含めて一般の医師が利用できるコピー機が 1 台もなかった時代であり大変重宝したが、複写された文字は次第に紫色に変色し、1 年以上たつと消褪して読めなくなる代物であった。

火曜日はラボの research conference であったが、Dameshek 先生のところには多くの訪問者があり、その人たちの lecture を聞く日にも当てられていた。

ラボでは Dameshek 先生から myeloproliferative disorders の概念を直接拝聴する機会に恵まれたが、この概念を発表された頃は造血幹細胞が証明されていない時代であり、あらためて先生の見聞に感銘を受けた。当然ながらこの時代には動物の造血幹細胞の CFU-S の話も話題になった。また、CLL はリンパ球の増殖よりも accumulation が主体をなしているとか、DiGuglielmo disease と refractory anemia, sideroblastic anemia など heme 代謝の異常や急性骨髄性白血病への移行など、いずれも同様なクローナルな病気であり、一括して DiGuglielmo syndrome と呼ぶのがふさわしいという話もされていた。また、smoldering leukemia という概念も聞いた。Baldini 先生からは ITP の病因、治療などの話を聞かされ、Mitus 先生からは細胞化学や染色体分析の血液疾患診断に関する意義などを聞いた。Schwartz 先生は、bursa of fabricius が鳥の B リンパ球産生部位であり、T リンパ球の産生に胸腺が重要であり、人でも同様に B, T リンパ球が液性免疫や遅延型免疫反応に関係するなどという免疫の基礎や自己免疫疾患の病態と治療、輸血に関する問題点などもよく聞かされた。また、当時、興味を覚えたのは GVH の長期生存マウスには Hodgkin 病などに似たリンパ性腫瘍が発生し、腫瘍の起源は宿主細胞であるという Schwartz 先生の仕事であった。また、fellow の Roderiguez-Eldman が動物実験における generalized Shwartzman reaction が DIC-consumption coagulopathy のモデルであると発表したのも耳新しく、印象深かった。

土曜日午前の前半は Prof. Weinstein の主催する Infectious Disease 部門のグラウンドラウンドで、ときには私も出席した。後半は、Hematology 部門のグラウンドラウンドが行われ、主催はもちろん Dameshek 先生であった。これには hematology のインターン、レジデント、clinical fellow, research fellow, と幹

部も出席することになっていた。したがって、Hematology 部門に関しては日本と同じく週休 1 日であった。

Dameshek 先生は常ににこやかであるが、威厳があって、一般に米国では親しい間柄では first name で呼び合うことが多いが、Dameshek 先生は特別で、教室の誰もが朝の挨拶でも first name を使うことなく、Good morning, Dr. Dameshek と挨拶をするようになっていた。

自分の研究



あるとき Mitus 先生から家兎を使用して実験的腎臓症を作り、赤血球増加症ができる研究をしているが、何か新しいアイデアがあるかと聞かれたので、自分が動物実験でしばしば経験してきた ferrokinetics のテクニックを応用して造血亢進を証明できるのではないかということを進言した。それが縁で、一連の造血の仕事に従事することになった。

動物飼育室は研究室内にあり、日本では当時病棟でも十分でなかったのに、動物飼育室も冷暖房完備であったのには驚いた。さらに、飼育員が常駐しており、飼育室の傍らにある小実験室ではちょっとした手助けをしてくれることになっていた (写真 3)。この人はリトアニアからの亡命者で、祖国ではオペラ歌手をして現在でも夜間はやはりオペラ歌手をしていたということであった。普段は作業服で働いているが、帰宅時に背広姿に代わると確かに堂々たる体躯で歌手然とした風貌になった。しかも、ときに動物室の中でオペラのアリアの一節を素晴らしい声で歌ってくれた。最初は動物ケージの確保、動物の購入から始めなければならなかったが、研究室内の競争も激しく、1 年目の Fellow にとっ



写真 3. 動物舎にて飼育員 (左端) と

てはケージの確保もままならなかった。さらに、水腎症を作るにあたって動物手術室の予約などいろいろ自分で行う必要があった。初め Mitus 先生が手伝って下さったが、少したってからは自分一人で動物に手術も行うことになった。しかし、当時の慶應大学の血液研究室ではありえなかった専任の女性実験助手がいたのはありがたかった。その上、動物の採血をするとき disposable の注射器や注射針をそろえてくれたのには、またまたカルチャーショックを受けた。なぜなら日本では当時病院ですら注射器や注射針は煮沸消毒したものを使用していた。また、驚いたことに研究室内の電灯、エアコン、実験器具の電源は切る必要がないことになっていた。さらに、ラボ内のどこでもアイソトープを使用できたし、アイソトープを使用した動物も廃棄してもらえた。また、病棟でも、ラボでも輸血にはプラスチックバッグが使用されていたのも初めての経験であった。このような調子で仕事をこなしながら時間はかかったが、1964年10月に実験の水腎症による多血症の最初の論文が Blood に掲載され、続いて第2報 (jaktglomerular apparatus に関する論文) が12月に Arch Pathol に載った。

その後はこの実験の水腎症の発生機序について仕事を進めることになり、水腎内圧の推移が造血に関係すると考えて、長期に実験的水腎症発症過程で腎盂内圧の測定に試行錯誤しながら取りかかったが、意外に時間がかかって1年ほど費やすことになった。結局1965年の Federation of American Society for Experimental Biology で発表することができた。スライドは原図を描いて渡すと病院のフォトセンターのようなところで、きれいな図や表を作って、スライドに仕上げてくれた。当時はパソコンがなかったので、書き込みや訂正のたくさん入った原稿を、ラボの秘書さんに渡してお願いすると、きれいに仕上げてもらえ、発表の用意ができた。また、この仕事を Boston Blood Club の一環であるうか、ハーバードの Peter Bent Brigham Hospital で F. Gardner 先生や D. Nathan 先生らの前で発表させてもらうことができた。また、大学の新聞からも取材された (写真4)。この仕事は私が筆頭者として論文にまとめ、Dameshek 先生の最終許可をいただいて J Lab Clin Med に投稿できたのは大分後の1965年秋になってしまったが、後にこれらの仕事が Wintrobe や Williams の教科書などに引用されてうれしかった。

当時の米国の時代・世相



当時の米国は1962年10月にソ連のキューバへのミサイル基地設置を巡って起こったいわゆるキューバ危機において、ケネディ大統領の決断により米ソの核戦争が回避された冷戦時代の

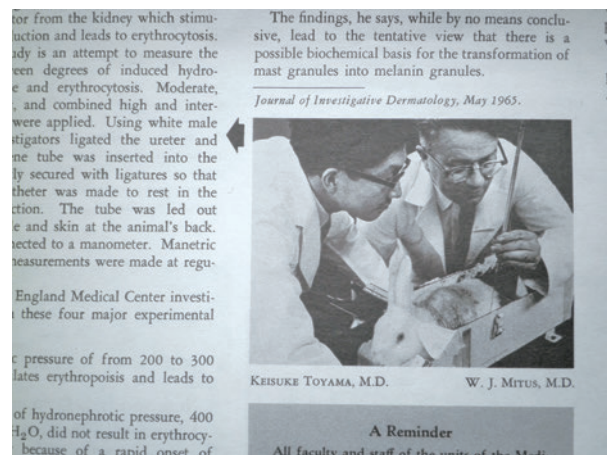


写真4. Tufts-New England Medical Center News

真ただ中であった。当時、私は東京代々木にある米軍宿舎 (現在の青少年センター) で英会話の個人授業を定期的を受けていたが、いつもは簡単に入れるゲートのところで、係員に止められ、「どの家に何時に、何の目的で行くか」と尋問され、しばらく留められたのち、会話の先生とのアポイントが確かめられて、やっと敷地内に入ることができたが、敷地内がいつもと全く違う緊張感に満ちていた。先生に聞いた話では宿舎全員に自宅待機が命ぜられているということのみ知ったが、このときがまさにキューバ危機であった。また、私が渡米した年の6月にはケネディ大統領が米国で人種差別が最後まで残っていたアラバマ大学に黒人学生を入学させ、公民権法案を議会に提案した。また、米国各地に公民権運動が盛り上がりを見せ、8月には黒人運動指導者キング牧師がリンカーンの奴隷解放宣言100年を記念する大集会を企画し、ワシントンDCでの大行進における同牧師の「I have a dream」という歴史的な名演説がなされた。

Fellow の一人のアフリカ系米国人女性医師がクラシック音楽好きで、私にレコードを聞かせてくれたことがあった。そこで私がそんなに音楽が好きなら当然ボストンシンホニーのシーズンチケットを持っているだろうと尋ねたとき、「我々にはそれは不可能だ」と返答されて、初めて米国北部でも差別が残っているのだということを実感した。

1963年11月22日金曜日は私にとって忘れられない日になった。昼食のための外出から帰ったとき、教室全体がいつもと違う静寂で奇妙な雰囲気包まれていた。通路には人影も見られず、ラボのいくつかの部屋や会議室では医師や女性の研究助手がラジオを囲んで耳をそばだてていた。どうしたのだと聞くと、一人から「大統領がテキサスで撃たれた」という返事が返ってきた。その後しばらくして「President Kennedy died at 2pm

Eastern standard time」という声がラジオから流れると、あちらこちらの部屋からすすり泣く声が聞こえ、「我々の大統領が殺された」と叫ぶ者もいた。このような大事件に遭遇するとは思ってもしなかった。

翌土曜日の朝、この事件のことを知ろうと思って町に新聞を買いに出かけたが、街路にはいつもの土曜日と違ってほとんど人影がなく、店の多くは閉じていて新聞も入手できなかった。中にはショーウィンドーにケネディ大統領の写真などが飾ってある店が幾つか見られた（写真5）。

日曜日のお昼頃、知り合いになった東京大学心臓外科から留学されていた三浦健先生のお宅を訪れ、居間でテレビを一緒に見ていると、丁度、大統領暗殺犯と目され逮捕されていたオズワルドが警察から移送されるため警官に囲まれて、警察署の廊下を護送されてくるのがテレビに映し出されていたが、突然画面に一人の人物が飛び出てきたと思った途端、銃声がかかって人々がオズワルドの周辺に折り重なるように集まって、彼の姿が画面から見えなくなった。法治国家において重大犯罪の容疑者が警察内で殺されるのを、実際にテレビで目の当たりにしたときは本当に驚愕した。そして何か大きな陰謀でもあるのかと感じた。現在でも大統領暗殺の真相が判明しないという大事件の一部をテレビで目撃してし



写真5. 百貨店ショーウィンドーに飾られたケネディ大統領の追悼像

まった歴史的な日だった。

11月25日月曜日、例によってDameshek先生の回診があったが、いつもより少し早く終了して、当時は教室にはテレビが存在しなかったため、病棟の片隅にあるテレビで、ケネディ大統領の棺が議事堂から墓地へと運ばれる葬儀の列が映し出されている光景を教室の人たちと一緒に見た。このとき幼かった故大統領の長女カロラインさんが、50年後に駐日米国大使に就任されるとは、当然のことながら全く想像もできなかった。

1964年頃から米国はベトナムに本格的に介入し始め、いつの間にか25セントや10セント硬貨が純銀でなく、表面のみが銀でメッキされた状態になった。莫大な戦費が使用されたせいかと肌を感じた。

Prof. Dameshek の教室と日本人医師



私より前にDameshek先生の教室で研究または長期に滞在された方々は、熊本大学内科河北靖夫先生、東京医大臨床病理の福武勝弘先生、藤巻道男先生、岡山大学内科大藤真先生、京都大学内科深瀬正市先生らがいらっしやう。私が働き始めて間もない9月にDameshek先生に呼ばれ、「Dr. Fukutakeが教授になって教室を尋ねてくるから迎えに行ってもらいたい」と言われ、福武先生をホテルに迎えに行き、病院の近くのギリシャレストランでの会食に同席したことがあった。また、東京医大内科の長村重之先生がDameshek先生の回診に参加されたこともあったが、この先生方に私が後に東京医科大学でお世話になることは夢にも思わなかった。名古屋赤十字芳賀圭五院長にも例によって回診のときにお会いした。大阪大学病理の岡野教授が来られたときは、回診の後Freedom trailにお連れした。

名古屋大学内科の日比野進先生、木村禧代治先生、山田一正先生が御一緒にDameshek先生を尋ねてこられたが、その日は私は感冒でラボを休んでいたためにお会いできなかった。

教室では感冒にかかると、当時の日本と異なって「人に病気をうつすと困るから早く帰って休養しろ」と皆から言われるのが習慣であった。しかし、コンビニもない時代に病気になって寄宿の部屋に寝ていると、冷蔵庫もなく食料の蓄えもないので、発熱のあるときに食べ物を買うに行くこともできないという悩みがあったが、教室のfellowが「食事は大丈夫か、何か食べ物を届けようか」と電話をくれたり、寺田先生が食事を差し入れて下さったのには、今でも感謝している。関西医大内科の大久保晃先生が訪問されたときは、Baldini先生がfellowたちを自宅のパーティへ招待された日であったので、大久保先生を私の車に乗せてお連れ

した。Baldini 先生のお宅は前庭に招待者の車がほとんどパークできるくらい広く、邸宅の部屋に大きな木やローマ時代の貴族の屋敷のように大理石の像が置かれているという豪邸であった。

病院生活



Hematology fellow としての勤務が始まった頃、病院の新メンバーがそろったためか、S. Proger 病院長を中心に、Department head の教授たちをはじめとする病院の医師全員で記念写真を撮った。

私は寄宿に住んでいた関係から、病院までは Harrison Avenue を渡るだけであったので、部屋から白衣を着たままでラボに通った。食事は寄宿舎に食堂がないので朝食は取らず、昼食は病院の医師、看護師、検査員、学生などが入れるカフェテリア（自分で食事をトレイに取ってレジで現金を払うという普通のスタイル）ですませたり、Mitus 先生や Kosmos や他の fellow たちと病院のそばの小さなカフェで食べた。また、病院には医師のみが昼食をとることができる staff dining room という特別食堂があった。ここではウェイトレスが注文を取りに来て食事をテーブルに運んでくれる。お金は伝票にサインをすると給料から差し引かれるようになっていた。その上ここでは有名な教授たちと同席になり話をすることもできたので、病院で医師が大切にされているように感じ気分が良かった。しかしながら、味気ないのは夕食で、ほとんどの人が家庭に帰るので、一人で病院のカフェテリアで食べるか、病院の近くのカフェや中華料理店で食事をとる他はなかった。しかし、ときを経るにしたがって友達ができ、次第に夕食を誰かとレストランでしたり、どこかの御家庭に呼ばれたりするようになり、味気なさは解消した。

給料は毎月末の昼前に病院のメールルームの私書箱のような棚にチェックが入れられる。この時間には医師たちが続々とやってきて、このチェックを取り出し、近くの銀行に持参して、現金化したり、自身のパーソナルチェックにするのが習慣になっていた。慶應大学では大学院課程修了後は無給助手という身分だったので、これが生涯最初の給料ということになり感慨無量であった。

9月に入ると街路樹が紅葉し始め、学生たちが戻ってきて授業が始まるので本格的に仕事が始まった感じがするようになった。私はこの頃には Dameshek 先生との契約が翌年も確実に延長されると伝えられて安心した。

9月末にマサチューセッツ免許をお持ちの寺田先生に私の車に同乗していただいで役所へ行き、口頭試験と実地試験を受けて運転免許を取ることができた。口頭試験のために勉強する教本は

Q&A 形式の 100 問位の薄いパンフレットであったが、内容は「スクールバスから子供が乗降しているときは、反対車線の車も停止する」「水たまりに飛び込んでブレーキが利かなくなったときは、走りながらブレーキを何回か踏んで乾かすべき」「凍った道路では強くブレーキをかけない」などと実用的な項目ばかりで、現実にこのおかげで助かったこともあった。その合理的なことにも感心することになった。

車の運転が可能になることはいろいろな意味で世界が広がることになる。ボストンでは、他の病院を訪れる場合、少し大きなものを買うため、どこかのお宅に招待されたときも車が必要であることが多い。後にニューヨーク (NY) や Atlantic City, NJ の学会に出席するにも必要になったし、また、レクリエーションとして夏の海水浴や秋の紅葉見物、近郊のプリマス、コンコード・レキシントンなど歴史的な場所の訪問などには必須である。あるとき、同僚の fellow が「圭助は馬鹿だ。寄宿舎に住んでいるのに何故、車を持つのか」と言ったので、私は「君こそ馬鹿だ。自分は車を持っているから寄宿舎に住んでいるのだ」と言い返し、周りの人が笑ったことがあった。

通りを隔てた Tufts 大学医学部の教室では、Dameshek 先生の授業も見学することができた。先生は授業の前半は日本と同じように系統的な血液学の話がされたが、後半には必ず非常に先進的な話をされ、なるほどと感心させられた。また、スライドをたくさん使用しないで学生が講義を聞きながら考えられるようにすべきとも言われていた。このことは後に自分が日本で講義を担当するようになった折に教訓になった。また、血液学の学生実習を手伝ったこともあるが、学生たちが使用している顕微鏡がそれぞれ異なっており、当時としては極めて高価な双眼のニコン顕微鏡あり、ライツの古い一眼の顕微鏡ありの千差万別であった。不思議に思って尋ねてみると、それぞれ私物だという。当時貧しいとはいえ慶應大学では全員の顕微鏡は学校でそろえて用意されたものであったので、つくづく日米の考えの相違というものを感じた。

当時の Tufts 大学関係の教職は、Boston City Hospital の Prof. W. C. Molony, J. F. DesForges, St Elizabeth Hospital の F. Stohman Jr. などがおられ、学生の講義や若手の研究を指導をされていたので、ときにその講義を拝聴することができた。

10月最後の日曜日には夏時間が終わって秋が深まってきた。11月に入ると小雨がちな天候が続くようになった。また、感謝祭の日には家庭を持つ医師たちが、独身の医師を家庭に招待して七面鳥の料理を御馳走するのがしきたりであることを知った。12月の初めになると初雪があり、雪をかぶった街の景色は非常にきれいになるが、交通には極めて困難な季節になった。当然タイヤをスノータイヤに変え、oil を冬用に交換し、窓ガラス、ワ

イパー、鍵穴などの凍結に対して融解剤を用意するなど準備が必要になる。さらに、当時の車は少し放置するとバッテリーが上がってしまうので、休日には充電のためにいたずらに高速道路を走らせねばならなかった。また、道路には融雪のため塩化カリがまかれるので車の底面が傷みやすいという悩みがあった、しかし、この頃になると病院の近くの Boston Common にはクリスマスのデコレーションとして、キリスト生誕の小屋や博士や羊などの人形が飾られ、それらが豆電球で飾られ、さらにそれらが雪をかぶって美しい幻想的な風景を醸し出すようになった。

初めての ASH と クリスマスシーズン



12月の初めには American Society of Hematology の学会に出席することが許された。Boston Logan Airport から Air Shuttle という便でワシントンへ飛んだ。これは今では考えられない簡単なもので、予約も必要なく、出発時間の少し前に飛行場のゲートを通り、旅行鞆は飛行機に乗る寸前にタラップのそばにいる乗務員に手渡し、飛行機に乗って適当なところに席を取る。時刻になると飛行機が飛び立ち、水平飛行になると乗務員が回ってくるので支払をする。Washington National Airport に到着すると、タラップの下に置かれた荷台から自分の荷物を取って空港ゲートの外に出るという、非常に便利な乗り物で、まさに空の乗合バスというべきものであった。ワシントンの地理がよくわからないので、White House に近い Hay Adams Hotel を空港の電話で予約して宿泊した。華やかではないが重厚な作りのホテルであった。後年になってこのホテルがワシントンの名門ホテルであったことを知ったが、2度とこのようなホテルに泊まることはなかった。ホテルから会場は徒歩で行けた。会場で当時珍しかった日本人らしき医師に日本人かと尋ねられ、お互いに自己紹介し合ったのが、京大第一内科から NY 州の Cooperstown に留学され、さらにカナダモントリオールの McGill 大学に移られていた笠倉新平先生であった。これが縁で在米中には先生からときに電話をいただいたり、学会でお会いしたりした。学会期間中にアーリントン墓地を訪れ、暗い冬の空の下ケネディ大統領の真新しい墓に永遠の炎が燃えているのを見て感慨を新たにした。

12月半ばのある夜に Hematology のクリスマスパーティが病院で行われた。教室の幹部、医師、実験助手、検査員、秘書など全員が病院の広間に集まった。今ではどんなパーティだったか思い出せないが、今でも鮮明に覚えているのは Dameshek 先生の前に一人ずつ進み出て各々ねぎらいの言葉をかけていただき、医師は封筒をいただいた。中には Blood 誌の1年間の予約購読の

カードが入っており、例年の恒例のようだった。医師以外の女性たちは何か別の包をいただいているようだったが、何だったか不明である。

その数日後、病院全体のクリスマスパーティが、S. Proger 院長と事務長の Mr. Vigers の主催で病院内で行われた。普通に挨拶、乾杯から始まり音楽も入った。宴がたけなわになり、ユダヤの音楽が奏でられると、Jewish の若い医師たちが集まり輪になって、自分の胸の前に腕組みをして、膝を折った姿勢でコザックダンスのような踊りを踊り、大変盛り上がったが、これは印象的だった。最後には司会者が出席者全員に、女性は内側、男性は外側に輪になって手をつないで立つように指示し、音楽が始まると男女それぞれが反対に回るように指示した。そして、音楽が止まったところで男女が向かい合いになり、その相手とダンスすることを命じた。私のお相手は生憎私より大分背の高い女性になってしまったが、逃げ出すわけにもいかず冷や汗をかいたが、全員が紳士淑女であったので助かった。このときの経験から、ノーベル賞の授賞式では背の低い受賞者には何か配慮があるのかなど時々思った。

また、この数日後の日曜日夕刻に Dameshek 先生から教室の全員が Cleveland Circle 近くの先生の自宅に招待された。立食ではあるが、とにかく教室の全員が御自宅に入れるほどの邸宅であった。御自宅のあらゆる部屋や廊下に日本人形や書画など骨董品が飾ってあるのには驚いた。

私のいた寄宿舎の自分の部屋の電話は直接外線呼び出すことはできず、すべて交換台を通ることになっていた。クリスマスの日に電話を取って交換台を呼び出したところ、交換手が「Merry Christmas, Dr. Toyama」と、少しセクシーな美しい声で答えてくれたので、どんな人なのかと好奇心を抱いた。後になって病院の交換台の見えるところを通ったことがあったが、3人ほどの交換手が見えたが、どの人もお年を召している方ようだった。クリスマス翌日には Mitus 先生が自宅でパーティをして下さった。とにかく米国の医師たちのパーティにおけるオペラ、音楽、絵画などの美術、スポーツなどに関する話題の豊富さと、ユーモアあふれる話術には圧倒される思いがした。私も、食前にたまたま米国で人気の大学アメリカンフットボールの試合をテレビで見ているときに、「あ！ Fair catch だ」と思わず口に出してしまったところ、一緒に見ていた Baldini 先生の fellow の Dr. F. Morrison (後にミシシッピ大学教授) が「Football がわかるのか、好きか」と尋ねてくれて、それが縁で友達になった。

年末は日本と違って、大晦日の夕方まで普通に働いた後、Mitus 先生の部屋で数人の医師たちと、簡単に乾杯をしてお別れとなった。その夜は渡辺先生の紹介で知り合った New England Center Hospital のカナダ人の Dr. MacPharson が御家庭パー

ティに招待して下さったので、1964年の午前0時に「Happy New Year」とクラッカーを鳴らして、一家と一緒に大騒ぎして祝うことができた。病院がいわゆる Jewish 系のせいかクリスマス休暇はなく、元日1日休日で2日から普通に働き始めたが、日本の年末年始と大いに違ってさびしい感じがした。

Boston Blood Club と 欧米のゲスト



当時のボストンには、Boston City Hospital の Harvard 部門に胃内因子発見者の Prof. W. Castle が現役でおられ、Peter Bent Brigham Hospital に有名な Sydney Farber 先生や D. Nathan 先生、マサチューセッツ工科大学には鎌状赤血球症の Hb 解析で有名な V. Ingram 先生などがおられ Tufts 大学一門と Boston Blood Club を組織されていた。Dameshek 先生の教室には欧米からのゲストも多く、1964年に入って最初に来られたのはフランスの Georges Mathé 先生である。先生は世界で初めてヒトに骨髄移植を試みられ、事故にあった原子力科学者に移植を行って命を救った方で、がん治療において移植細胞ががん細胞と戦うことを発見し、免疫ががん治療に重要であるという観点から白血病治療に BCG を導入した人であった。同じ頃に英国から、後に Aplastic anemia-PNH syndrome を提唱された J. V. Dacie 先生が病院を訪れられて、Boston Blood Club の一環として lecture をされた。また、いつだったかはっきり思い出せないが、William B. Castle 先生が病院の講堂で悪性貧血や内因子発見についてお話をされたことがある。悪性貧血患者治療に肝臓を “never on Sunday” で食させたと、当時有名であった映画のタイトルを入れられ聴衆の気をひかれたのが記憶に残っている。

1964年の5月に、免疫寛容の獲得の研究でノーベル賞を受賞された Sir F. Macfarlane Burnet 先生が Dameshek 先生を訪問されたことがあった。Lecture の後、Dameshek 先生がラボを案内されて回られた。私が働いていた部屋では私のことを日本から来ている医師と紹介して下さい、さらに、「Burnet 先生に自分の仕事を御説明下さい」と言って下さった。日本ではこのようなことは一度もなかったもので、大変光栄なことと感激して、一生懸命説明した。この経験でモチベーションが上がったことは事実であった。

1964年の春から夏



4月頃になるとボストンではまだ木々の芽生えには早いですが、気

候が春めいてきたので、weekend を利用して三浦健先生御夫妻とワシントンの桜見物に車ででかけた。当日は快晴に恵まれ桜は満開となった。日本ほどではないが、やはり米国でも珍しいような人出で、騎馬警官が交通整理を行って、ポトマック河畔では駐停車は禁止され、低速で車を走らせながらの観桜となった。日本と異なって音楽、宴会は禁止されているのか、静かで清潔な感じがし、川面に映えて桜は誠に見事であった。しかし、交通整理をしている警官が、少しでも停車したりした車を見ると、ののしりながら車を足蹴にしたのを見たときはやはり日本と違っているなと感じた。

5月初めには Atlantic City, NJ で催された Federation of American Society for Experimental Biology に教室からは Dameshek 先生をはじめ大勢の医師が出席した。教室では学会に出席するときに前もって旅費を小切手で手渡されたが、記憶では 50~70 ドルくらいで、旅費にはとうてい足りないもので、一般的には車をシェアしていくことになっていた。前もってモンテリオールから電話下さった笠倉先生と学会で会うことを約束していたので、学会前日に笠倉先生と Captain Stern's という有名な sea food のレストランでおいしい口ブスター料理を食べて大いに楽しんだ。学会では Mitus 先生が私たちの仕事を発表された。学会中 Atlantic City で有名なボードウォークを歩いているときに、東大第三内科の服部理男先生と八幡義人先生にお会いしてお話をしたが、このときが八幡先生とは初対面であった。また、その夜 Dameshek 先生御夫妻が会期中に学会に出席していた全員を Captain Stern's の dinner に招待して下さい。感心したのは Dameshek 先生が皆に食前に one drink を注文してよいとはっきり言われたことである。学会から帰ってきて最初に Dameshek 先生と顔をあわせるときは、先生は医師の一人一人とこやかに welcome back と言って握手をされ、どういう話題が最も興味深かったかと尋ねられた。このことは学会中もぼんやりしてはいけないう無言の教育のように感じた。この手を後になって日本でも使ってみようかと思っただけで、ついぞ実現しなかった。

学会に出かける頃は、ボストンはあまり木々が緑緑していないが、帰ってくると、天気は快晴になることが多く、エルムの木々が新緑となり、いたるところで花が咲いて、ボストンの最も美しい季節になっていた。

5月22日は Dameshek 先生の誕生日で、回診の後で教室の会議室で全員が集まってお祝いをした。ケーキとコーヒーだけのささやかな会ではあったが非常に和やかな雰囲気であった。私はこのときまでラボに写真機を持ち込んだことはなかった。なぜなら、私は見学者ではなく、給料をもらって働いている身であるという自負があった。また、携帯電話やスマホのような手軽で高性能



写真6. Prof. Dameshek と Dr. Schwartz (教室の Dameshek 教授誕生会)

能なカメラがない時代であり、当時のカメラは常時携帯するには大きすぎた。私のカメラは当時世界的に最新のキヤノンカメラではあったが、普通サイズのもので、ストロボや露出計も内蔵していない。したがって、簡単に室内で撮影できるものではなかった。さらに、シャッターはフォーカルプレーンで、その上当時の普通のカラーフィルムは ASA23 のコダックフィルムだったので、撮影時のカメラの静止が難しく、写真は手振れで不鮮明になってしまった (写真6)。

6 月末で年度が切り替わり、少なくとも clinical fellow は全員入れ替わる。したがって、記念に Hematology 全員で New England Center Hospital の Bennet St. に面した入り口で記念撮影をした (写真7)。残念ながら Baldini 先生とそのグループの医師と実験助手が不在で、この写真に写っていない。

ある土曜日に慣例の clambake party が、病院主催でボストンの北西 Ipswich に近い海岸の Castle Hill というところで催された。ここは屋敷の前に緑の芝生の庭が海岸まで広がっている。しかも、この海岸は非常に美しい private beach になっているという素晴らしいところである。このパーティには病院の全員が招待されることになっていて、前以て、当日ロブスター 1 匹を食べることができる券が男性 1 人に 2 枚ずつ配られる。したがって家族持ちの人は、欠席する人あるいは 1 枚不用の人から余分の券を入手しなければならない。独り身の男性にはこの券が配られた途端に、女性から自分を連れて行ってほしいと申し出が殺到することになっていた。私にも申し込みがあって、当日は女性実



写真7. Hematology 全員写真



写真8. 病院の clambake party

験助手を車に乗せて行ったと記憶している。現地では庭の真ん中には大きな釜が据えられ料理人がロブスターや、ハマグリを料理していた。その周りには顔見知りの医師たちや家族たちが散らばっており、砂浜で遊ぶ人々や子供たちもいた。Dameshek 先生は欠席だったが Mitus 先生の家族や Hematology のの人たちと合流し、大きいロブスターとハマグリの食事を堪能した (写真8)。ビーチの海水は非常に冷たくて多くの人は甲羅干しやビールを飲んで日向ぼっことおしゃべりに興じていたが、Mitus 先生は元氣よく泳いでいた。

(次号へつづく)



Episode 8 (後編)

50 余年昔の米国留学 —Prof. Dameshek の最後の fellow—

本コーナーのタイトル「Be Ambitious!」はウイリアム・エス・クラーク博士の名言“Boys, be ambitious like this old man”から拝借しました。「未来を自ら切り拓くべし」という後進への強い期待の意も込めて、長年に渡り、血液学の世界で活躍して来られた名誉会員の先生方から現役の先生方に向けた熱く且つ含蓄豊かなメッセージをお届けいたします。



東京医科大学名誉教授
第 17 期日本学術会議会員
損保ジャパン日本興和診療所
外山 圭助

2 年目のシーズンと父の死



1964 年 7 月から新プログラムが始まるので、research fellow の一部が去り、新しい人が入ってきた。なお、この時期から新たに大阪市大生理学の木下喜博助教授が Dameshek 先生のラボで research fellow として働くことになり、御家族で来られケンブリッジに住まわれることになった。先生はリンパ球分離を御専門とされ、胸腺や免疫のグループで仕事をされることになったが、私はこのときが全くの初対面であった。

私の実験助手はボストンにある Northeastern University の学生に変わった。この大学の年数は普通より 1 年長くなるが、2 人 1 組になって、1 年ずつ同じ施設で実験助手として働いて学資を得るという仕組みになっていた。なかなか実用的な制度であると感じたが、現在の日本でもこのような制度はあるだろうか。

病院では毎日、日本と異なって医師たちにひっきりなしに「Dr. XX, 5326 (電話番号), Dr. YY, 2145」と交換手からの院内呼び出しの音が響いており、該当の医師たちが慌ただしく廊下にある電話に駆け寄ってダイヤルをまわしていたが、それが今シーズンから廃止された。相当コストはかかったらしいが、病院の臨床に携わる全医師に PHS のような器具が配られ、該当医師にのみ連絡が来るようになったのである。したがって、連絡を受けた医師だけが最寄りの電話から知らされた番号に電話すればよくなった。このこと自体に大いに感心したが、興味があったのはカンファレンス中で、レジデントやインターンが教授に質問している最中でも呼び出されたときは、医師は質問も中断して無言で中座してしまうのであった。この辺りにも日本との文化の差が感じられた。

7 月の初めに母から珍しく私に速達の航空便が届き、「父が体調不良で兄の勤務している大学病院に入院したが、胃がんが肝臓にまで転移しているのがわかったので手の施しようがない。父には病名を知らせずにおくから、お前は帰国する必要はない。そのまま米国で仕事を続けなさい」と書いてあった。実際に当時は帰国する旅費も手元になかったが、とにかくそのまま受け入れた。しかも、本人に病名を知らせてないので手紙にも当たり障りのないことを書くしかなかった。また、私は米国へ到着してから一度も国に電話をかけることもなかったので、ましてや今更電話はできなかった。

7 月末日に手にした 2 年目の初めての給料は月 400 ドルに増加していて、とにかく米国で普通に仕事のできたのだと実感できた。また、1963 年 7 月 1 日～1964 年 6 月 30 日まで New England Center Hospital の Research Fellow in Medicine

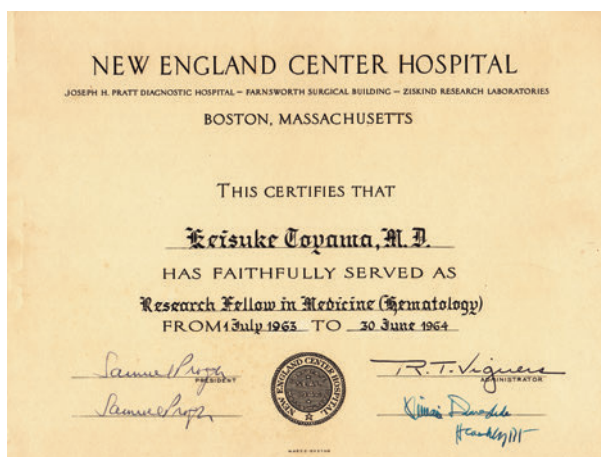


写真 9. New England Center Hospital の Dameshek 教授署名入り fellow 修了証明書

(Hematology) として勤めたという Dameshek 先生の署名入りの証明書をもらった (写真 9)。

8 月半ば母から父が 7 月 6 日に 67 歳で亡くなって、葬式も納骨もすべて兄とともに済ませたという知らせが届いた。私は 16 歳で、仕事の関係で関西に住む父母のもとを離れ、東京で兄と 2 人で学校に通ったので、両親と会えるのは学校が休みの春、夏、正月の年 3 回のみであった。しかも、医師になってからは春休みがなくなり、正月休みも短くなったので、ますます自宅で過ごす日が減少していた。私が留学をすることになったとき、父は大変喜んでくれた。そして、羽田を発つ数日前に父母は上京して来て、空港で見送ってくれたのだった。飛行機に乗るときに父が「元気だな」と言ってくれたのが最後の声であり、飛行機の窓から送迎デッキの上で手を振ってくれた姿が、私が見た最後の父であった。この日はさすがに気分が落ち込んだが、寄宿の部屋で独り父の冥福を祈った。

次の週にはラボの人たちの誘いで 1 日休暇を取って、ケネディ大統領の別荘のあったマサチューセッツ州南部の Cape Cod に行き Denisport という町で夜遅くまでさわいで、別荘に泊めてもらい 3 時間ほど睡眠をとって、一人だけ車でラボに戻って仕事をした。8 月末に 1 週間の夏期休暇が取れたので、病院の Cancer Research の Prof. Fishman のラボで研究されていた九大薬学部の加藤敬太郎先生と、MGH に留学してきた私の同級生と共にケベック、モントリオール、トロント、ナイアガラなどカナダ東部を車で旅行した。最後に Buffalo, NY の Rosewell Memorial Institute に慶應大内科の先輩を尋ねた。

Jimmy fund と ボストンにおける楽しみ



ボストンで感銘を受けたのは Jimmy fund である。この fund は 1948 年に白血病の Jimmy 少年を助けようとボストンで呼びかけられた基金である。秋になって映画館に映画を見に行くことが多くなるが、いつも映画の休憩時間の前後に短い映画が上映される。それには戦前の米国プロ野球、大リーグ Boston Red Sox のスタープレイヤーで打率 4 割 6 厘を記録し、当地の英雄となった Ted Williams が画面に現れて、Jimmy fund への募金を呼びかける。そしてこの画面が終わると明かりがついて、帽子が客席に回ってきて観客のそれぞれが、なにがしかの金額を寄付するようになっていることだった。このように常に大衆にがん対策を啓蒙しているのには感心させられた。このほかにもボストンでは Jimmy fund による医学講演会がしばしば行われ勉強もできるようになっており、ボストン留学中はこの講演会によく出席した。

New England 地方の秋の紅葉は誠に素晴らしい。9 月の末の週末はニューハンプシャー州は紅葉見物の車で渋滞する。また、10 月の初めにはマサチューセッツ州の西部でも紅葉が素晴らしくなる。北国特有な急激な寒さと空気が澄んでいるためか、このほか美しいので、週末はこのような景色を大いにエンジョイした。

ボストンは有名な美術館もあり芸術の都でもあることは知られている。私はもともと絵画は大好きであったが、音楽に関して日本では N 響の定期会員になったこともあったが、なかなか音楽会にゆくチャンスがなかった。しかし、ボストンでは 10 月から翌年の 5 月までボストン交響楽団の定期公演会が symphony hall で行われる。さらに、7 月にはマサチューセッツ州の西端の Tanglewood という素晴らしい景色のところ、毎週末演奏会が開かれる。しかも、このときは有名指揮者、演奏家が招かれて共演する。また、ボストン中心のチャールズ河畔でも音楽会が開かれる、というように音楽を聴く機会に非常に恵まれている。当時のボストン交響楽団の常任指揮者は日本であり知られていないラインスドルフという人に代わっていたが、前常任指揮者のシャルル・ミンシュ自身が指揮をしたり、ハリウッド映画でおなじみのストコウスキが指揮をすることもあった。また有名ナリヒター、ルビンシュタイン、パン・クライバーンのピアノ演奏を、あるいはオISTRAFF やアイザック・スターンのバイオリン演奏を生で聴くこともできた。また、病院のすぐ近くにある Music Hall では米国各地や外国からの有名なオーケストラ、バレエ、オペラなどが上演され、カラヤン指揮のベルリン交響楽団の

演奏、レニングラードバレエや英国ロイヤルバレエ、NYのメトロポリタンオペラの公演など鑑賞することができた。さらに、近くには劇場もあって演劇も上演されるので、実際にピピアン・リーの出演した演劇も見ることができた。その上、日本と異なってこれらの入場券は簡単に入手できた。新聞に演奏会や演劇の広告が載ると、希望の公演日と、希望の席すなわち balcony (2階席) あるいは floor (1階席) と、希望の人数を記して、personal check と一緒に郵送すると、確実に入場券が手もとに送られてくる。このほかスポーツ分野ではMLBのBoston Red Soxの野球場もあり、Yankeesのマントルやマリスのプレーも見られた。冬季にはNFLのPatriots、NHLやNBAの試合があり、実際にCelticsのNBA 7連覇を見ることもできた。

パーティで知ったラボの医師たちの話題の豊富さは、このような経験から得られたものであることが理解でき、自分もこの町に住むことができたことを感謝した。しかし、同時に日本の医師の多忙な生活は、ストレスが多すぎると感じた。

1964年の秋から冬



この年の10月にはアジアで初めての東京オリンピックが行われたが、当地では大統領選挙と重なって、人々やマスコミの関心もそちらの方にひきつけられていた。したがって、時差の関係もあるが殆どオリンピックに関してはテレビでも報道もされないし、職場でも話題にならなかった。女子バレーボールで日本が金メダルを取って、日本中が沸いたらしいが、ボストンにいと殆ど知り得なかった。このオリンピックで米国は世界一多数のメダルを取っているにもかかわらず、現在の日本の過熱ぶりと比較すると、きわめて対照的であった。一方、大統領選挙に関しては連日ラボでも話題が出ない日はなかった。ある日テレビを見てみると、コマーシャルのように、水の上に板で作られた合衆国が映し出され、鋸が合衆国の東の部分を切り離して水に落とすところが映し出された。この間、鋸の板を引く音のみが聞こえ、何のナレーションもなく、最後に“反対する部分は要らない”といったような言葉が発せられた。これは共和党候補者の陣営のキャンペーンだったらしいが、非常に驚いた。結果的にこのときの選挙は民主党の現職リンドン・ジョンソンが大差で勝った。

11月15日～17日にASH meetingがシアトルで開催された。Dameshek先生が会長であったが、会場が米国西岸とあって教室のほとんどの医師たちは残念ながら参加できなかった。この年の感謝祭の日にはラボの研究助手がKosmosと私を自宅に招いてくれたので、前年同様七面鳥をごちそうになった。この月の末には1965年度も私のNew England Center Hospitalの契

約が延長されることが決まってくれた。

12月には週末にNYを訪れた。丁度街はクリスマスシーズンたけなわで、ボストンより華やかなイルミネーションで飾られ、非常に印象的だった。帰国後、年を経てASHに出かけ、このようなデコレーションを各地で見る度にこのときのことが思い出された。

この年の暮れのHematologyのパーティでは前年同様Bloodの年間購読券をDameshek先生からいただいた。

1964年の12月のある日、ラボの私の所へ、いわゆるケーススタイルの白衣を着た日本人の医師が訪ねてこられた。顔を見て片山勲(後に埼玉医大病理教授)先生であることを知って驚いた。私が慶應大学病院で知っていたのは、米国帰りの脳神経外科医であったからである。先生は2回目の渡米でTufts大学の病理のレジデントとしてBoston City Hospitalにお勤めだったが、希望してNew England Medical Centerにローテートしてきたとおっしゃって大変懐かしがって下さった。先生は後にこの当時はleukemic reticuloendotheliosisと呼ばれていたhairy cell leukemiaの白血球細胞内のribosome-lamella complexを発表して有名になられた。

当時のボストンの冬は厳しく、気温は常に零度以下でマサチューセッツ工科大学の前あたりで最も川幅が広がるCharles Riverがすっかり凍ってしまった。

初めての学会発表



1965年2月の終わり頃に4月の学会で私が発表することが決まった。私にとって学会発表は日本で1回のみで、ましてや英語では初めてのことであるので、Mitus先生が発表の原稿のチェックや発表の仕方を教授して下さいました。特に注意されたのは英単語の語尾をはっきり発音すること、RとLの発音の差に注意することなどであった。その後英語の発表にはこの教えを守っている。

4月の初めにFederation of American Society for Experimental Biologyの学会に発表するために、Cancer Researchの加藤先生とAtlantic City, NJへ自分の車で出かけ、現地でMitus先生と合流した。4月10日の午前の部で初めての演者としての発表を行った。質問にも答えることができ、発表は無事終了した。この学会では会場がボードウォーク沿いのそれぞれのホテルであるので、全米のいろいろな所から来ている研究者たちは、ボードウォークを歩いていることが多い。私も同じラボからの医師にも会ったし、慶應大学から米国に留学していた基礎の先生、臨床の先生とも会うことができた。その夜は例のごとく

Dameshek 先生と奥様を囲んで教室から来ている全員と会食があった。また、会期中には笠倉先生と Captain Stern's で会食したのは言うまでもなかった。

4月19日はボストンでは、米国独立の折、ボストン近郊の Concord に集結していた独立派の義勇軍を、英国軍がひそかに襲おうとしていたのを知った Paul Revere が、馬を駆って先回りして義勇軍に知らせ、そのおかげで独立軍が大勝利した事実を記念して州では4月第3月曜を Patriot's Day として休日にしており、ボストンマラソンはこの日に行われることになっている。前年はゴールよりも大分遠い Brookline で見たが、日本人の活躍は見られなかった。この年はゴールのプルデンシャルセンターに近い Commonwealth Ave の街角で曇天のもとレースを見た。人ごみの中に立っていると次々とランナーが見えてくるが、日本人ランナーが好順位でやってきた。その後も次々と上位に日本人がやってきた。観客の間から「日本人だ」「また、日本人？」という声が聞かれた。このときは重松森雄というランナーが優勝し、その他何人かの日本人ランナーが好成績を上げたので、やはり日本人として誇らしかった(写真10)。近年、ボストンマラソンのときにテロがあったことは記憶に新しいが、この Boylston St の現場と私の見物していた道端はかなり近かった。あらためて平和のありがたさを感じている。

5月の初めに毎年 Atlantic City, NJ で行われる Journal of Clinical Investigation の meeting に出席することができることになった。この会はかなりレベルが高くここで発表できることは名誉であって、この年は教室の誰かが発表する機会を得たが、誰だったか思い出せない。とにかくこの会に出席することが許可されたので、教室の fellow の車に同乗させてもらって出掛けた。学会で私の1年後から Gainseville, FL のフロリダ大学に留学していた血液研究室の同僚と会ったので、夜は Captain Stern's で久しぶりの再会を祝して会食した。翌日の夜は毎回恒例となって



写真10. 1965年ボストンマラソン優勝者

いる Dameshek 先生と教室一同のパーティがあり、Captain Stern's Restaurant のロブスターディナーは Atlantic City の学会の記憶と結びついている。

Prof. Dameshek が ラボを去られる



この頃から Dameshek 先生が今年で New England Center Hospital の Hematology の director を引退されるという話が伝わってきた。そこで1965年の先生の誕生日を祝う会が名門の Somerset Hotel で盛大に行われることになった。このホテルは Mass Ave と Commonwealth Ave のコーナーにあり、季節は忘れたが毎年社交界にデビューする女性のパーティが催された。その季節には Boston Globe という土地の有名新聞の見開き2面を使って白いイブニングドレスを着た若い女性の写真が並び、それぞれ本人の名前と Mr & Mrs だれだれの御嬢さんであり、本年社交界にデビューすると紹介された。Dameshek 先生のパーティはここで行われ、教室の全員が夫人同伴で出席した。日本の何かのパーティのように形式張ったものではなく、和やかに淡々と進められた(写真11, 12)。

6月に入って Baldini 先生も Brown 大学に新設される医学部の教授として Pawtucket, RI へ去られることになり先生の送別会が Harvard Club で行われた。このクラブは確か Harvard の医学部の敷地内に存在しており、重厚な感じの部屋で dinner party の形式で行われたと記憶しているが、写真もないので詳細は思い出せない。この月末に教室で回診の後にコーヒーだけのお別れ会がささやかに行われた。

なお、例年行われる clambake party が前年と同じ場所で催さ



写真11. Prof. Dameshek の Hematology director 最後の誕生日会、教授御夫妻と



写真 12. Prof. Dameshek 誕生会：木下喜博先生と共に

れた。このときは同じ教室の Kosmos と木下先生御一家を私の車に乗せて Castle Hill へ行った。そこで、Mitus 先生御一家や九大の加藤先生と一緒に前年同様にロブスターを食べ、浜辺で遊んだ。

3年目のシーズンへ



1965年7月に入ると Dameshek 先生は NY の Mt Sinaï Hospital に新設される大学医学部の準備のために New England Center Hospital を去られ、代わって Hematology と Blood Research Laboratory の director として Prof. William H. Crosby がワシントンの Walter Reed 陸軍病院から赴任してこられた。Crosby 先生は iron metabolism, PNH, 小腸の intraluminal biopsy, hemochromatosis の分野で有名であった。さらに、元 Dameshek 先生の hematology fellow でもあったので、お二人の引き継ぎというのもほとんどなく自然に入れ替わったという感じであった。また、新たに Assistant Professor として hemochromatosis を専門とする Louis Weintraub 先生と新しい clinical fellow や research fellow が教室に加わった。この中に後に私の親友となった Dr. Lung T. Yam (後に hairy cell leukemia の tartarate resistant acid phosphatase で有名。Louisville 大学教授) やドイツ人の Dr. Peter Lorbacher (後に Bonn や Wiesbaden 大学教授) が入っていた。一方では親しかった人たちが次々と去っていった。

教室の雰囲気は当然のことながらかなり変わった。土曜日の Hematology のグラウンドはなくなってしまって、週休2日になった。これは Crosby 先生の宗教上の理由だという話を聞いたことがあるが、真偽のほどは明らかでない。

その他の教室のスケジュールは大体同じであった。Mitus 先

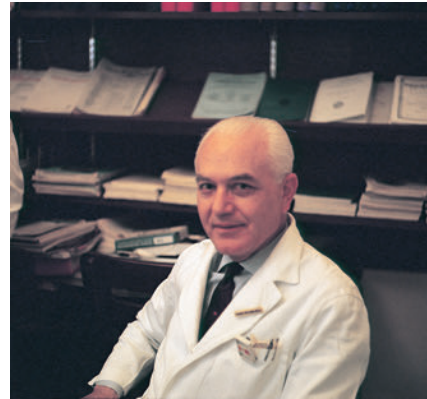


写真 13. Baldini ブラウン大学教授

生、Schwartz 先生は残られたので変わらない部分もあるが、discussion のテーマは少し変わって鉄代謝や hemochromatosis の治療、溶血性貧血などが多くなった。

いつだったか Schwartz 先生が一部の fellow たちを自宅に招いて下さった。その席上、先生がこの顔ぶれは何だと思つて皆に尋ねた。誰も答えられなかったら、Schwartz 先生が「来ていない人は AD fellow, すなわち after Dameshek fellow だ。ここにいるのは BC fellow, すなわち before Crosby fellow だ。我々は彼らとは違う」と冗談めかして話されたことがあったが、特に Dameshek 先生と親密だった Schwartz 先生の案外本音がなと思った。

7月か8月だったか Baldini 先生(写真13)に新しいラボを見に来ないかと誘っていただいたので、Pawtucket, RI の Brown 大学を訪ねた。Baldini 先生の所へは New England Center Hospital で働いていたイタリア人の fellow 一人がついて行っていた。そこで Baldini 先生から「来年は自分のラボへ来て働かないか」といわれたので、私は血小板の仕事はやったことがないと答えると、先生は「大丈夫、すぐ慣れるよ。君が hard worker なのは New England Center Hospital でよく知っているから。給金も必ず今より上げるから」と熱心に誘っていただいた。その後、先生にラボを案内していただいたが、先生はラボの人たちに今度来ることになった Dr. Toyama だと私を紹介されたのには驚いた。ボストンに帰っているいろいろ考えてみた結果、もし病院を移って新しい仕事をするとさらに2年位かかるかなと考え、ボストンに残ることにした。もしこのとき Baldini 先生のお誘いの通りにしていたら、広島原研の蔵本淳先生、京大の大熊稔先生、慶應大の池田康夫先生等と同門になっていたかもしれない。

私にとっても大きな変化があり、2年間住み慣れた寄宿舎 Posner Hall が1965年度より看護学生の寄宿を拡張するので、寄宿契約の延長は不可能で、引っ越すようにと Educational

Secretary にいわれた。6月の末からアパートを探し、Back Bay Fens という公園に面している Park Drive 51 のアパートを見つけて引越した。ここは公園を隔てて Musium of Fine Art (有名なボストン美術館) があり、近くに Boston Red Sox の本拠地 Fenway Park があった。このアパートは入り口に番人はもちろん鍵がなく、エレベータはあったが、私の部屋は4階にあり、冷房はなく、スチーム暖房つきで、ベッドルーム、キッチン、バスルームがあった。家具付きでベッド、クローゼット、冷蔵庫とコンロは都市ガスであり、電気代、ガス代込みで月97ドルだったと記憶している。夏期は大きな扇風機を窓にはめ込み、周りを段ボールで塞ぐという具合であった。Parking space はアパートの裏にあったが、満車のときはアパートの前の道路に十分スペースがあるのでここに駐車することもできた。このような状態のアパートでも当時のボストンのこの辺りは、独身の私にとっては特に治安的に不安はなかった。あまり、他の住人に会うこともなかったが、朝の出勤時や夜間に勤め人風の女性に会うこともあったので、私のみが特に治安に疎かったわけでもないと思う。

9月の半ばに日本大学内科助教授の天木先生が Prof. Crosby の教室に来られ翌年まで滞在されることになったので、先生の宿舎を御一緒に探して差し上げた。10月にはボストンの中心であるブルテンシャルセンターの近くに新築されたシェラトンホテルを舞台に Tufts 大学の postgraduate course が開催され、hematology の分野には教室の医師も出席することが許されたので、天木先生や fellow たちと出席した。このとき、どの lecture でも教科書的な話と先進的な話が盛り込まれていた。

このほか Boston blood club や Jimmy fund で行われる講演会が、翌年の春までいろいろな場所で行われるので、Mitus 先生や天木先生、fellow たちと出席した。そして、会の前または後に、これらの人たちと一緒に日本食レストランで夕食をしたものである。

11月に入って体がだるく、なんとなく熱っぽく、咽頭痛が続いた。扁桃腺や咽頭を自分で鏡を使って観察しても炎症は見られなかった。そこで、内分泌教室の Associate Prof. Mead III の診察を受けた。先生は甲状腺部を触診して、私に「なんだと思う」と質問したので、thyroiditis と答えると「そのとおり」と言われた。そこで radioactive iodine uptake 試験を受けた結果、亜急性甲状腺炎という診断で「甲状腺を少し休めるために甲状腺ホルモンを投与する」と言われ、甲状腺ホルモンの錠剤をもらった。しかし、しばらく服用してみたが何やら不安感が強くなり、指に振戦を感じるようになったので、再診を受けて私のような日本人の体重は米国人の平均体重より少ないはずだと訴えて、減量してもらったら、このような症状はなくなった。いずれにしてもその病院で働く医師は医療を無料で受けられたので非常にありがた

かった。ここでも当時の日本（慶應大学）との違いを痛感した。

北アメリカ大停電



この頃の記憶に残った事件は11月9日に米国北部に広範囲に起こった大停電である。この日夕方仕事を終えてそろそろ帰宅しようかと考えていたときであった。私はまだラボにいたが突然ラボ全体の電気が非常灯を含めて消えた。このときは病院の停電だと思ったが、真っ暗で何も見えない。しかし、まだかなりの医師がラボに残っていたので皆が集まってきて不安はなかったが、一番困ったのが自分のロッカーを見分けることと、さらに鍵穴が見えないのでキーを差し込むことができない。当時はまだ携帯電話がない時代なので皆が困っていた。そのときに廊下の方から灯りがロッカールームに近づいてきたのでちょっと安心したが、間もなくその正体は一人の clinical fellow が紙巻きたばこを吸いながらやってきたのだった。タバコの火が暗闇ではこんなに明るく見えるものだとして初めて知った。そこで煙草の火を頼りに一人一人がロッカーから必要なものを取り出すことができたが、研究室のビル全体に灯りがなく、エレベータも動かないし、だれもが階段を使った経験がない。そこで全員が塊になって、この fellow にマッチを擦りながら先導してもらって、階段を1階まで何とか降りることができた。ビルの外に出て驚いたのは街灯を含めて灯りというものが全くなく町中が真っ暗なことだった。しかも、この季節では完全な夜になっていたが、この日は幸運にも満月であったので駐車場の自分車までたどり付いた。さて、自動車をゆっくりと走らせて帰宅しようとしたが、信号機も全部消えているので、日頃はいくつ目の信号を右折するなど記憶していないので、信号機のない道を走っていると街角がいくつもあって、曲がるべき街角がわからない。また、信号機がない交差点を渡るのが非常に危険だったが、幸い皆が非常にゆっくり走っていたので助かった。車のラジオは「停電はボストンだけでなく、広く広がっていて、交通信号は消えているのでドライブには注意するように、また、ハーバード大学の学生がシャツのような白い布を持って、自主的に交通整理をしている」と報じていた。さらに、NYへの航空機はフィラデルフィアへ、バッファローへの便はシカゴへと目的地を変えたと報じていたので、これは大規模な停電だと理解できた。そして一番感じたのは戦争ではないかと思った。帰宅してすぐに近くの小さな食料品・雑貨屋のような店に行きローソクと食料を買って帰り、急いでバスタブの栓をあけると、幸いぬるいお湯が出てきたので、風呂に入ったが、その後、水は出るがお湯は出ない状態になった。そして日本から持

参したポータブルラジオに聞き入った。このラジオからはこの停電がアメリカ東北部のみならずカナダ東部にも及んでいることを報じており、さらにホワイトハウスとクレムリンを結ぶ red line はつながっていると連呼していたので、とりあえず戦争のようなものではないと安心した。あたりは非常に静かで、満月が真っ暗な周辺のアパートをこうこうと照らしている窓からの光景は非常に印象的だった。しかし、日本各地がアメリカ軍の空襲にあって戦時中の私の少年時代でも、このように広範囲に停電することはなかったので、戦後 20 年近くたったこの時点での大停電は信じられない感じであった。停電が発生した時間にはまだ手術を行っていた病院も多く、自家発電で続行した病院もあったが、一部では長い間停電には遭遇していなかったため、いざ自家発電機を動かそうとしたら、全く動かず、やむを得ず懐中電灯で手術を続行したという例もあったらしい。やはり危機管理というのはいつでもどこでも重要であると思う。

3 年目の冬から夏



1965 年 12 月の初めに ASH Annual Meeting がフィラデルフィアで開催されたので、2 人の fellow と車をシェアして朝 6 時頃ボストンを出発、昼にフィラデルフィアに到着してすぐ学会に出た。ホテルは Mitus 先生と同室であったが、先生は夜、窓を開けて寝るのが習慣らしく、私は通常窓は閉めて寝るので、毎夜先生が窓を開ける、私が気が付けば閉めるということを繰り返した。4 日目の学会終了後、夕刻フィラデルフィアを発って夜中にボストンに帰った。

その週末には NY へ行った。前月後半の週末に NY Hilton Hotel で行われた Hodgkin disease のシンポジウムに出席するため、天木先生と車で往復したので、今回は一人であることから、車を避けて air shuttle を利用した。あらかじめアポイントをいただいていたので土曜日に Mt Sinai Hospital に Dameshek 先生を訪ねた。病院は central park に面しており、5 番街にある玄関には青いテントのような屋根が突き出ており、制服を着たドアマンが立っていた。雰囲気はまるでホテルのようであった。先生の部屋は重厚な感じであったが、あまり大きくなく、あたりに研究室はなく秘書と 2 人きりという感じであった。先生は私が訪ねたことを喜んで下さった。現況をお話したが、先生もこれからここに医学部を設立するという抱負のような話をして下さった後、院内を簡単に案内して下さいました。夜は慶應大学内科の恩師三方一澤教授が NY に来られていたので、教授御一行とは NY の高級日本料理店で会食させていただいた。夜 NY からボストンへ、初めて Greyhound の夜行バスを利用することになって

しまったが、乗客層が航空機とは全く違って、思わず緊張してしまった。

クリスマスには Mitus 先生のお宅に天木先生と御一緒に招待され、御一家と静かなクリスマスを過ごした。そのときまだ小さかった Mitus 先生のお嬢様が、後に Hoffman の Hematology Textbook だったかに、執筆者の一人として名を連ねていらっしゃるのを見たときは時の流れの速さに驚いたものだった（写真 14）。

2 月から 5 月まで月に 3 回くらいのペースで Massachusetts Institute of Technology (MIT) で行われる radioisotope の course に出席する機会を得た。これは夕方から MIT で行われて、基礎講義や実地があった。ラボの fellow たちと出席した。このコースで学んだことは後に慶應大学でも役に立った。

この頃には研究の上では、実験の水腎症による赤血球増加症の発生機序に関して、腎臓実質の萎縮の少ない場合には赤血球増加症が発生し、萎縮の程度が強いと発生しないことから、腎実質の血管の状態を腎血管から造影剤を注入してレントゲンで観察すると共に、erythropoietin (Epo) の経時的変化も測定する必要が出たために、低圧タンクを利用して、多血マウスを作製し bioassay 法で Epo を測定することになり、St Elizabeth Hospital の Prof. Stohlman の所へ行って標準 Epo をもらってきた。Stohlman 先生は Mitus 先生が“American greatest hematologist”と評するように、巨大な体軀をもたれ、声は祠の中で話をされているようであるが、親切だった。先生は Dameshek 先生後の Blood の editor-in-chief になられたが、さらに後にエーグ海上空で航空機テロに遭遇されて亡くなったのは残念である。

5 月の初めに Federation of American Society for Experimental Biology の meeting に出席するため天木先生、Dr. Lorbacher と車で Atlantic City, NJ へ行った。Prof. Crosby に



写真 14. 天木一太先生（左）と Dr. Mitus 一家のクリスマス会

なっても現地のレストランでのパーティは踏襲された。帰りにNYで日本に帰国される天木先生とお別れした。

1966年6月1日から3日までNew York Academy of Science主催の“Erythropoiesis”のシンポジウムがNY市の名門Woldorf Astoria Hotelで催され、Mitus先生も参加することになり、私が行っていた実験的水腎症による赤血球増加症の仕事の第4報を発表することになった。この仕事は赤血球増加の原因は、腎臓実質の血流の障害がerythropoietin産生の増加を招くことを示したものであった。日本からは演者として東京大学第3内科の高久史磨先生ただ一人が招待され、発表も堂々としておられ、感心した。このホテルで高久先生と初めて個人的にお会いして、先生の部屋で旧友のシカゴの先生方にも紹介していただいた。高久先生からシンポジウムのあとボストンを訪ねるからといわれた。その次の週のある日の午後に先生が約束どおりNew England Center Hospitalに来られた。先生にラボをお見せしたとき、低圧タンクで多血マウスを作成する機会に、追加輸血のための採血の方法が効率良く行かないので、先生にお教を乞うたところ、先生は気楽に引き受けて下さって、上着を脱いで実地に教授して下さい上、先生の研究室の電話も教えて下さった。この御親切は忘れられない。その後先生とビールを飲んでいるいろいろお話しをした。夕方、NYへ帰られる先生をボストンのsouth stationまで車でお送りした。このときの縁で、帰国後、私は先生に何かとお世話になることになった。

1966年6月21日火曜日は本当に思い出深い日になった。この日はほぼ1年ぶりにDameshek先生がNew England Center Hospitalにこられ、この年度でTufts大学の教授も辞して本格的にボストンを去られることになったので、Dameshek先生とCrosby先生以下その日いたラボの全員で病院のBennet Stに面した玄関で写真を撮った(写真15)。その後、先生は部屋にこもって何かしておられた。午後、秘書さんが皆に先生の署名入りの御自分のポートレイトを配ってきた(写真16)。今日が先生のNew England Center Hospital最後の日になるのだと気がついて、我々が御挨拶をしようと部屋にかけつくと、すでに先生は誰にも気付かれずに長年仕事をされた部屋を去られて、腰掛の上にProfessor William Dameshekと書かれた名札のついた白衣のみが残されていた。

あとがき



米国留学は私の人生に非常に大きな影響を与えた。当時の日本とあまりにもかけ離れた生活環境、研究室や病院の設備と医師の生活などを経験したこと、さらに、いろいろな人とかかわって



写真15. 1966年6月Prof. DameshekとProf. CrosbyとHematology 医師全員

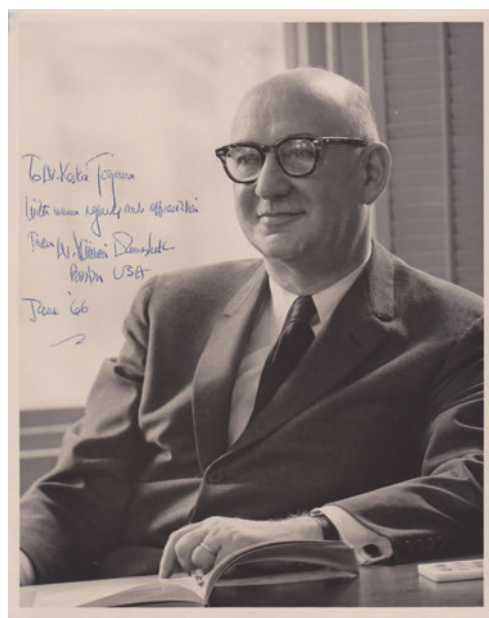


写真16. Prof. Dameshek から1966年に戴いた署名入り写真

学んだことは、私にとって貴重な財産になった。特に、Prof. William Dameshekの下でhematology fellowとして働いたことは大きい。Dameshek先生は偉大な臨床血液学者で、種々の疾患患者を注意深く観察し、病態を解明し、新しい治療を実行され、真にevidence based medicineを実践された方である。さらに、先生はAmerican Society of Hematologyの設立と発展にも寄与された。現在ASHの発展を見るとDameshek賞の存在する意義は大である。